

「三宝通信」法話

浄土宗 天上山 大念寺

住職 大島 祥明



引導を渡すとは、「本人」にもはやこの世にもどれないことを悟らせること

葬儀とは、死によって身体と「本人」が分かれたときに、その「本人」に対して遺された者たちや僧侶が、儀式や言葉でもって「あなたは、亡くなったのですよ」と教えてあげることなのです。そして、この世への執着や未練を断ちきってもらうのです。

これが枕経であり、通夜であり、葬儀を行う意義であるわけです。

よく「引導を渡す」という言葉をお聞きになるかと思えます。「引導」というのは、

もともとは「手引きする」「案内する」というような意味ですが、人々を導いて仏道に入らせる意味で使われていました。「引導を渡す」というと、とくに、死者を迷界から浄土へと導く儀式のことになります。

「迷界から浄土へ導く」には、死者に、「自分が死んだという事実」を確実に認識させ、現世への執着を棄てさせて、悟りの仏道へと進むようにさせねばなりません。そのためには、「あなたはまちがいなく死んだのですよ」という事実を、死者に宣言する儀式が必要になるのです。もはやこの世にもどれないこと、この世の未練を断ちきって浄土に進むしかないと、悟らせるわけです。

それが「引導を渡す」という意味であり、葬儀を行う意義なのです。

● P H P 研究所刊『死んだらおしまい、ではなかった』より。